●演習ワークシート

事例 1

症例：20 歳代，男性
主訴：胸痛

胸痛で受診．X 線検査で右の高度肺虚脱を指摘され，気胸の診断で胸腔ドレーン挿入を実施され，入院．ドレーンにはチェストドレーンバッグが接続されているが，ウォーターシールの状態である．

【入院時現症】

血圧	脈拍数	体温	SpO_2	呼吸数
123/67mmHg	69 回/分	36.1℃	97%（室内気）	18 回/分

意識	チューブ	挿入部	排液
GCS 4-5-6	閉塞，折れ曲がりなし	出血なし，皮下気腫は若干のみ	入院時点ではない

演習課題 1

胸腔ドレーン挿入後の事例を提示しました．胸腔内持続吸引器の設定について検討してください．

・設定が可能かどうかの評価も行ってください．
・評価にあたり，必要な情報をすべて挙げてください．

演習課題 2

入院時の状態について提示しました．

・胸腔内持続吸引器の設定について検討してください．

●演習ワークシート

事例 2

症例：70 歳代，男性

自転車走行中の交通事故により搬送．外傷性の左血気胸により胸腔ドレナージを実施され，緊急入院となった．

申し送り内容：当日で入院 3 日目の経過．日勤帯の所見として，ドレーンからの排液は淡血性，およそ 10mL/時程度の排液が認められており，少量のエアリークが続いていた．現在−10cmH_2O の持続陰圧吸引を行っている．SpO_2 は 97%前後（O_2 3L/分）で推移しており，意識は清明，その他バイタルは問題なし．

夜間に呼吸困難でナースコールあり．

【訪室時現症】

血圧	脈拍数	体温	SpO_2	呼吸数	意識
149/96mmHg	91 回/分	37.1℃	96%（3L/分）	24 回/分	GCS4-5-6

左呼吸音は減弱，皮下気腫の増大なし．ドレーンからのエアリークは消失しており，呼吸性変動も消失している．

演習課題 3

入院時の状態について提示しました．

・考えられる病態について答えてください

・次にとるべき行動について答えてください

演習課題 4

ドレーンの所見から，とるべき対応について検討してください．

手順書	低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定及び設定の変更

【当該手順書に係る特定行為の対象となる患者】
1. Ⅱ°以上の気胸で胸腔ドレーンが留置されている
2. 胸部術後で胸腔ドレーンが留置されている
3. 慢性胸水で胸腔ドレーンが留置されている

【看護師に診療の補助を行わせる患者の病状の範囲】
□意識状態の変化なし
□バイタルサインの変化なし
□SpO_2≧92%
□ドレーンの状態に変化なし

病状の範囲外
不安定
緊急性あり
→ 担当医師の携帯電話に直接連絡

病状の範囲内
安定
緊急性なし

【診療の補助の内容】
低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定及び設定の変更

【特定行為を行うときに確認すべき事項】
□意識状態の変化
□バイタルサインの変化
□SpO_2≦91%
□ドレーンの状態の変化

どれか一項目でもあれば，下記の確認をして担当医に連絡
□出血
□皮下気腫の増大
□性状の変化（膿様，白濁など）
→ 担当医師の携帯電話に直接連絡

【医療の安全を確保するために医師・歯科医師との連絡が必要となった場合の連絡体制】
担当医師

【特定行為を行ったあとの医師・歯科医師に対する報告の方法】
1. 担当医師に連絡，時間外は当直医へ連絡
2. 診療記録への記載

厚生労働省（2018）．特定行為に係る手順書例集．より

●演習ワークシート

実習日：　　月　　日

研修生番号：　　研修生氏名：

事例 1

演習課題 1　（胸腔ドレーン挿入後）胸腔内持続吸引器の設定について検討

設定可能かどうかの評価

評価にあたり，必要な情報

演習課題 2　（入院時）胸腔内持続吸引器の設定について検討

3）特定行為の診療記録（実際に実施したと仮定した際の実施記録を記載する）

必要に応じ，A3 に拡大印刷を行う

●演習ワークシート

事例 2

演習課題 3　考えられる病態

次にとるべき行動

演習課題 4　ドレーンの所見から，とるべき対応

必要に応じ，A3 に拡大印刷を行う